

# 2023 SAGA YOU GO! I GO! HERE WE GO!!

開催基本構想



 第78回 国民体育大会  
 第23回 全国障害者スポーツ大会

両大会の開催に向けて、さあ始めよう



YOU GO! I GO!  
HERE WE GO!!  
2023 SAGA

# プロローグ

めざすのは、選手、スタッフ、ゲームズメーカー※、観客など、両大会に関わるすべての人々が最高のパフォーマンスを発揮し、誰もが自分のスタイルでスポーツを楽しみ共感し合える喜びを、佐賀から発信する大会。

そのために、両大会の準備段階から、大会の開催、そして大会が終わったあともずっと、

あなたの心に、  
わたしの心に、  
みんなの心に、

スポーツを通じた共感、共鳴、一体感が生まれるように、地域のさまざまなヒト、モノ、コトと大会との融合を念頭に、これから取組みを行っていきます。

コンセプトワードは、**融合**。

さあ、大会の成功に向けて、  
あなたも、わたしも、みんなでスタートダッシュ！

[※ゲームズメーカー：P7参照]

# 両大会への思い

融合は、もう始まっている!!

子どもも、大人も、障がい者も、高齢者も、スポーツを楽しみ、共感する心は皆ひとつ。

だからこそ、平成35年佐賀県で開催する「国民体育大会」と「全国障害者スポーツ大会」の基本構想を、全国で初めて、一つのものとして作成しました。

年齢、性別、障がいの有無にかかわらず、誰もが住み慣れた地域の中で、気軽に集い、交流し、お互いに個性を尊重しあいながら生き生きと暮らしていける社会。

スポーツには、そうした社会の実現のために、みんなの心をひとつにする“ちから”があります。

佐賀県では、競技スポーツ、生涯スポーツ、障がい者スポーツ、プロスポーツなどを一元的に推進しており、たとえば「県民体育大会」・「佐賀県障害者スポーツ大会」・「さがねりんピック」の3大会の愛称を「佐賀スポーツフェスタ」に統一し、開会式や一部競技を合同で実施するなど、他県に先駆けて融合の形を模索しています。

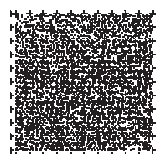
こうした中、平成35(2023)年の両大会開催に向けても、基本構想作成の段階から両大会について一緒に考え、さまざまな立場の方の思いやご意見をお聞きしながら、全国で初めて、一つの構想として作成しました。

でも形より大切なのは、両大会を通してみんなの心が融合すること。

誰もがお互いの違いを認め合いながら、共にスポーツを楽しみ、語り合える、そんな喜びを、佐賀から発信していきたいと思っています。

佐賀新聞社提供

YOU GO! I GO!  
HERE WE GO!!

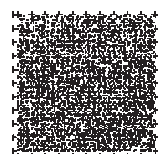


# 目次

I	プロローグ	1
II	両大会への思い	2
III	両大会の基本構想	
1	基本構想体系図	5
2	両大会の基本理念	7
3	基本理念を実現するための取組の柱	8
	取組の柱1 佐賀の【デザイン】との融合	8
	取組の柱2 佐賀の【スポーツスタイル】との融合	12
	取組の柱3 佐賀の【本物】との融合	15
IV	大会後に残したいもの	17
V	国民体育大会・全国障害者スポーツ大会の概要	18
VI	スポーツを取り巻く環境	19
VII	エピローグ	21

## この基本構想について

- この基本構想は、両大会を大会の前後にわたって意義あるものにするための基本的な考え方を示したものです。これから、両大会のさまざまな開催準備を行っていく際の拠り所として、また、県民の皆さまに、目指す大会像やそのための取組について知っていただくためにも活用します。
- なお、具体的な取組については、ここではいくつかの例示にとめています。





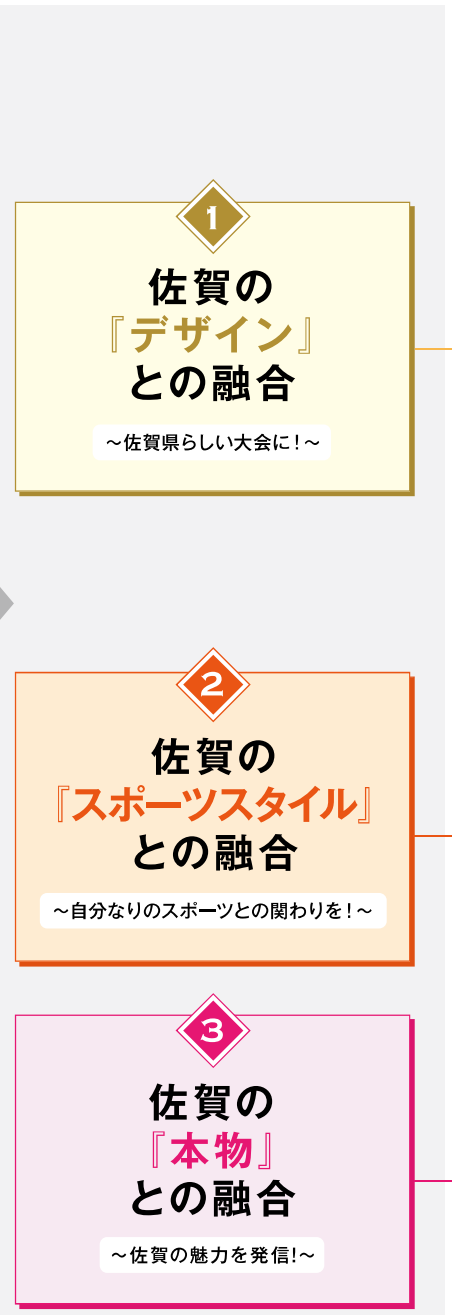
# III 両大会の基本構想

## 1 基本構想体系図

### 両大会の基本理念

選手、スタッフ、ゲームズメーカー、観客など、両大会に関わるすべての人々が最高のパフォーマンスを発揮し、誰もが自分のスタイルでスポーツを楽しむ共感し合える喜びを、佐賀から発信する大会。

### 基本理念を実現するための取組の柱



### 取組項目

- |   |                                   |
|---|-----------------------------------|
| 1 | 国民体育大会・全国障害者スポーツ大会を「佐賀県らしく」デザインする |
| 2 | アスリートやスタッフが最高の力を発揮できる環境をつくる       |
| 3 | たくさんの観客が楽しめる環境をつくる                |
| 4 | 最先端の技術を活用して情報発信する                 |
| 1 | 県民誰もが大会に関わる仕組みをつくる                |
| 2 | スポーツに親しむきっかけをつくる                  |
| 3 | 世代を超えた共感体験をする                     |
| 1 | 『本物』の自然、歴史、文化を発信する                |
| 2 | 佐賀ファンを創る、リピーターを増やす                |

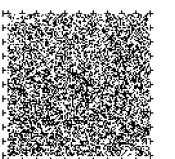
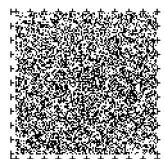
### 具体的な取組例

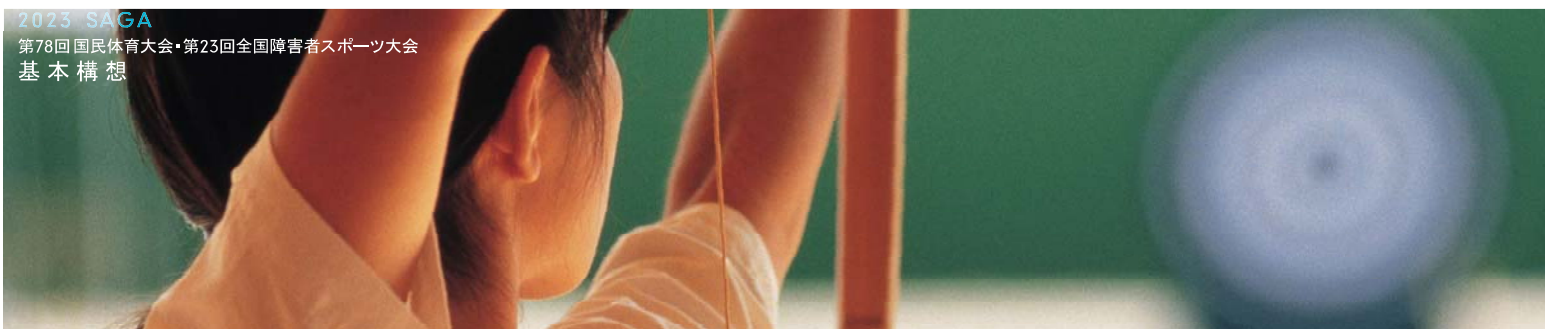
- |                            |
|----------------------------|
| ◆ 両大会開催準備の同時進行             |
| ◆ 総合開閉会式や競技の合同開催などの検討      |
| ◆ 国民体育大会へのエキシビジョン競技の導入 など  |
| ◆ 地元選手の競技力向上               |
| ◆ 施設の有効活用                  |
| ◆ ボランティアの育成 など             |
| ◆ 地元選手の情報発信                |
| ◆ 周辺イベントの充実                |
| ◆ 大会会場のユニバーサルデザイン化 など      |
| ◆ 情報通信技術 (ICT) の活用 など      |
| ◆ 県民のアイデア・ニーズの反映           |
| ◆ 県民一人ひとりがワンアクション          |
| ◆ スポーツの魅力を再発見 など           |
| ◆ 新しいスポーツの楽しみ方の提案          |
| ◆ 子どもたちの多様なスポーツ体験          |
| ◆ 障がい者スポーツ (パラスポーツ) の普及 など |
| ◆ 「みんなの応援団」の結成             |
| ◆ “わが町のスポーツ”育成 など          |
| ◆ 佐賀県の魅力を発信                |
| ◆ 佐賀県の『本物』の再認識 など          |
| ◆ 心に残るおもてなし                |
| ◆ スポーツツーリズム など             |

### 大会後に残したいもの



[さがんレガシー:P17参照]





## 2 両大会の基本理念

選手、スタッフ、ゲームズメーカー\*、観客など、両大会に関わるすべての人々が最高のパフォーマンスを発揮し、誰もが自分のスタイルでスポーツを楽しみ共感し合える喜びを、佐賀から発信する大会。

来る平成35(2023)年、国民体育大会と全国障害者スポーツ大会が、昭和51(1976)年以来47年ぶりに佐賀県で開催されます。

佐賀県で開催する2巡目の大会に当たり、それぞれの大会に出場する選手・監督はもちろん、大会に関わるスタッフやゲームズメーカー、そして、大会を観戦する観客など、両大会に関わるすべての人たちが、それぞれの立場で最高のパフォーマンスを発揮し、それぞれ自分に合ったスポーツへの関わり方で楽しみ、共感し合う喜びを佐賀から発信することを、基本理念とします。

### ※ゲームズメーカー

2012年に開催されたロンドンオリンピック・パラリンピックにおけるボランティアは、「ゲームズメーカー」と呼ばれ、競技者や主催者と一緒になって大会をつくりあげる存在でした。

佐賀県で開催する両大会に関わるボランティアや観客の皆さんも、「ゲームズメーカー」として競技者とともに大会をつくり楽しんでいただきたいと思います。

## 3 基本理念を実現するための取組の柱

### 取組の柱 1 佐賀の『デザイン』との融合

\*「佐賀のデザイン」とは、佐賀県らしい手法や工夫、サービス。

両大会に、「佐賀県らしい手法や工夫、サービス」を取り入れ、特色ある大会となるよう取り組みます。

### 取組項目 1

## 国民体育大会・全国障害者スポーツ大会を『佐賀県らしく』デザインする

平成13(2001)年から、両大会は同一都道府県内で開催されています。

それぞれの大会の歴史や開催目的に違いはありますが、両大会を通して、人々がお互いの多様性を認め合い、支え合う「共生社会」の理念を共有することが大切であると考えます。

このため、佐賀県で開催する両大会は、競技大会としての成功はもちろん、大会後も年齢、性別、障がいの有無に関係なく、誰もが、それぞれのスタイルで、スポーツを楽しむことができる環境が佐賀県に残るよう、取り組んでいきます。

そのために、可能な形での両大会の融合を図り、佐賀らしい手法やサービスで、大会をデザインします。

### 具体的な取組例

#### ・両大会開催準備の同時進行

融合の理念のもと、両大会の開催準備を最初から同時進行で進めます。

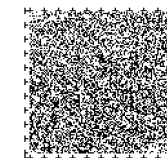
#### ・総合開閉会式や競技の合同開催などの検討

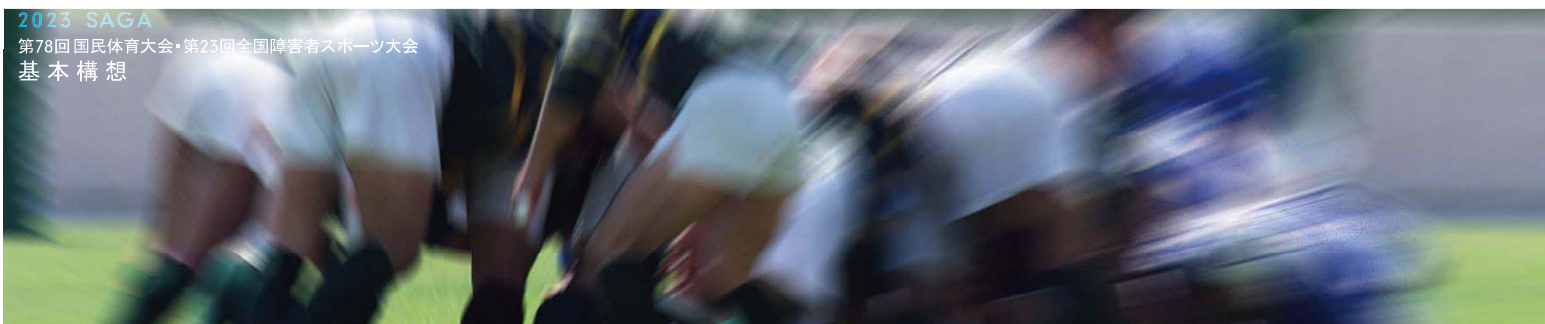
総合開閉会式や競技の合同開催などの可能性について、検討します。

#### ・国民体育大会へのエキシビション競技の導入

国民体育大会の開催期間中に障がい者種目のエキシビションの実施を検討します。

など





両大会の開催に向けて、さあ始めよう  
YOU GO! GO! HERE WE GO!!

取組項目②

## アスリートやスタッフが最高の力を発揮できる環境をつくる

地元選手が活躍することは、大会を盛り上げ、県民のスポーツに対する関心を向上させます。  
また、全国から集う選手はもちろん、競技役員やゲームズメーカーなど大会に関わるすべての人が、それぞれ与えられた場所で最高のパフォーマンスを発揮することが大会の成功につながります。  
みんなが最高の力を発揮できるよう、施設やシステムなどのユニバーサルデザイン化をはじめ、ハード面・ソフト面の環境整備を行います。

具体的な取組例

- ・ **地元選手の競技力向上**  
大会を契機に、地元選手の競技力の向上を図るため、中長期的な視野に立って選手の育成強化を行うとともに、指導者の養成などを計画的に進めます。
- ・ **施設の有効活用**  
既存施設の最大限の利用と大会後の有効活用のため、機能性・利便性向上のための整備に取り組みます。
- ・ **受け入れ環境の充実**  
佐賀県を訪れる選手たちが、持てる力を十分に発揮できるよう、快適な宿泊やスムーズな輸送環境の提供に取り組みます。
- ・ **ボランティアの育成**  
大会のスムーズな運営やスポーツ環境の充実のため、ボランティアの育成システムの構築を図ります。  
など

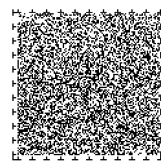
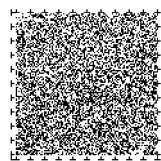
取組項目③

## たくさんの観客が楽しめる環境をつくる

多くの観客の声援を受けて競技できることは、選手の励み、喜びにつながります。  
一方、多くの人々が会場を訪れ、直接国内トップレベルの競技を観戦していただくことで、それを体験した人たちの生涯にわたるスポーツ実践の第一歩となることが期待されます。  
このことから、大会そのものや大会周辺のイベント等について、その魅力を伝えたり充実させることにより、県内外の多くの人が行きたくなる、観たくなる、魅力ある大会としていくことが大切です。

具体的な取組例

- ・ **地元選手の情報発信**  
県民の郷土代表選手に対する関心を高め、応援をサポートするため、地元選手の情報などを積極的に発信します。
- ・ **周辺イベントの充実**  
大会の開催に併せて、多くの人々が楽しむことができるスポーツや文化イベントを計画します。
- ・ **大会会場のユニバーサルデザイン化**  
観客にとっても使いやすく、快適な環境にするため、施設などのユニバーサルデザイン化を図ります。  
など





両大会の開催に向けて、さあ始めよう  
YOU GO! I GO! HERE WE GO!!

取組項目 4

## 最先端の技術を活用して情報発信する

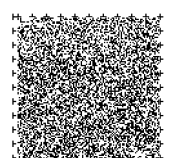
両大会の情報をいつでもどこでも入手することができるよう、選手・関係者や会場に観戦に行こうとしている人々、或いは、会場に行くことができない人々に対して、最先端の情報通信技術（ICT）を活用して大会に関する情報を提供するなど、積極的な情報発信に取り組みます。

具体的な取組例

・ 情報通信技術（ICT）の活用

最先端の技術を活用して、競技をLIVEで配信したり、競技会場周辺の駐車場の空き情報や天候などの情報を、オンタイムで選手や観客に伝える取組を行います。  
また、大会前から十分なPRを行うとともに、大会後も記録として活用できるようにします。

など



取組の柱 2

## 佐賀の『スポーツスタイル』との融合

\*「佐賀のスポーツスタイル」とは、年齢、性別、障がいの有無に関係なく、誰もが、自分らしくスポーツを楽しむというスタイル。

両大会の開催により、「年齢、性別、障がいの有無に関係なく、誰もが自分らしくスポーツを楽しむスタイル」が佐賀県に根付くよう取り組みます。

取組項目 1

## 県民誰もが大会に関わる仕組みをつくる

全ての県民が、大会の準備段階から大会期間中も含めて、いずれかの場面に何らかの方法で関わることは、県民みんなで大会を創り、大会を盛り上げる原動力となります。  
そのために、様々な意見を聴き、県民が参加しやすい取組を行います。

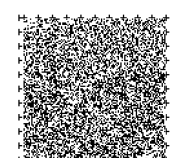
具体的な取組例

- ・ 県民のアイデア・ニーズの反映  
大会に関して広く県民の意見を聴く機会を設け、反映するよう努めます。
- ・ 県民一人ひとりがワンアクション\*  
県民の誰もが、スタッフ、ゲームメーカーや観客として直接参加したり、また、県民運動や準備活動に参加するなど、何らかの形で関わる「県民一人ひとりがワンアクション」に取り組みます。
- ・ スポーツの魅力を再発見  
大会を契機に、県民が新たなスポーツの魅力を再発見し、スポーツに関心をもつことができる取組を行います。

など

※ワンアクション

何か一つ、行動に移す(大会に関わる)ということ。





## 取組項目②

### スポーツに親しむきっかけをつくる

全国から集う国内トップレベルの選手による力と技・スピードを間近に観戦したり、デモンストレーションスポーツ\*などを観戦することは、スポーツに対する興味・関心を高めます。

併せて、競技会会場周辺で開催される各種イベントで多様なスポーツを体験してもらうことで、今後のスポーツ実践につながる事が期待されます。

また、両大会の開催を契機として、明日を担う佐賀の子どもたちが多様なスポーツを体験することができる環境をつくれます。

#### 具体的な取組例

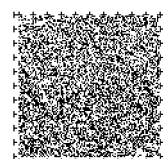
- ・ **新しいスポーツの楽しみ方の提案**  
誰もが気軽にできる運動やスポーツの普及に取り組むとともに、スポーツ大会と一緒につくり楽しむゲームズメーカーを増やします。
- ・ **子どもたちの多様なスポーツ体験**  
子どもの可能性を広げるスポーツイベントや体験会等を開催します。
- ・ **障がい者スポーツ(パラスポーツ\*\*）の普及**  
障がい者スポーツを多くの人に知ってもらうための場や機会を設定するとともに、障がい者スポーツも共に使える施設の整備に努めます。 など

#### ※デモンストレーションスポーツ

国民体育大会において正式競技や公開競技とは別に開催される、子どもからお年寄りまで幅広く親しまれているレクリエーションスポーツのことをいいます。

#### ※※パラスポーツ

障がい者スポーツのこと。「パラ(Para)」は英語で「もうひとつ」の意で、障がい者スポーツを「パラスポーツ(Para-Sports)」と呼ぶ動きも始まっています。



## 取組項目③

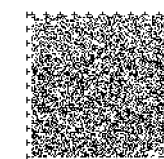
### 世代を超えた共感体験をする

両大会への参加や応援等を通じて、家庭や地域、学校等の様々なシーンで会話が生まれ、世代を超えた共感体験をすることはとても大切なことです。

このことは、地域のコミュニティの再生につながったり、「わが町のスポーツ」が育成されるなどの効果が期待されます。

#### 具体的な取組例

- ・ **「みんなの応援団」の結成**  
会場を盛り上げるとともに、大会後も地域間で交流が続くことを期待し、学校や地域で、出場チームの応援団を結成します。
- ・ **“わが町のスポーツ”育成**  
大会を契機にそれぞれの市町が「わが町のスポーツづくり」に取り組むことで、スポーツを活用した特色ある地域づくりにつながります。 など







### 取組の柱 3 佐賀の『本物』との融合

\*「佐賀の本物」とは、佐賀県が誇る、自然や歴史、食、技、伝統文化、人情など。

両大会を通じて、来県者に「佐賀県が誇る自然や歴史、食、技、伝統文化、人情など」に触れてもらい、佐賀ファンを創り、佐賀に再び訪れてもらえるよう取り組みます。

#### 取組項目 1

### 『本物』の自然、歴史、文化を発信する

佐賀県には、全国に誇れる『本物』の自然や歴史、食、技、伝統文化、人情などがあります。

県外から訪れた選手・関係者、応援者などに対して、あらゆる機会を捉えて佐賀の『本物』についてPRし、その良さに触れていただく機会を増やします。

また、両大会開催をきっかけに、県民一人ひとりが佐賀県の良さを再認識して自ら佐賀県ファンとなつていただくよう取り組みます。

#### 具体的な取組例

##### ・佐賀県の魅力を発信

佐賀県を訪れる人に、観光地、食文化を堪能してもらうとともに、伝統工芸・文化に触れて佐賀をより知ってもらうようアイデアにあふれた取組を行います。

##### ・佐賀県の『本物』の再認識

県外からのお客様を迎える佐賀県民が、まず「佐賀の本物」を再認識できるような広報を行います。  
など



#### 取組項目 2

### 佐賀ファンを創る、リピーターを増やす

佐賀県を訪れる人々が、県民一人ひとりのおもてなしのもと、佐賀の『本物』に触れ、堪能、感動していただくことで、佐賀県のファンになっていただき、大会後も、観光やスポーツ合宿等で再び佐賀県を訪れていただけるよう取り組むことが大切です。

#### 具体的な取組例

##### ・心に残るおもてなし

佐賀県を訪れた人々が、県民の心からのおもてなしにより、快適な時間を過ごしてもらえるよう、県民一体となって温かく迎えます。

##### ・スポーツツーリズム

スポーツキャンプ・スポーツ合宿などの、より一層の誘致を図り、スポーツを通じた観光を推進します。  
など





国民体育大会・全国障害者スポーツ大会  
基本構想

両大会の開催に向けて、さあ始めよう  
YOU GO! GO! HERE WE GO!!

# 大会後に残したいもの

平成35(2023)年に開催される両大会を成功させることで、両大会後も永く佐賀県に残したいものを、「さがんレガシー※」として表しました。



誰もが、それぞれのライフスタイルやライフステージに応じて、「する」「観る」「支える」など、日常的にスポーツを楽しむことができている。また、生活の様々な場面で、世代を超えてスポーツを語らっている。

- 例えは
- ◇ 町中でウォーキングなどをする人を多く見かけるようになった。
  - ◇ スタジアムでの試合日は朝からイベントなどで盛り上がっている。
  - ◇ スポーツボランティアが選手と同じように尊敬されている。
  - ◇ 競技場で祖父が孫に懐かしいスポーツの話をしている。
  - ◇ 障がいの有無に関わらず、人々のコミュニケーションが広がっている。



佐賀県ゆかりのアスリートやチームが、オリンピック・パラリンピックや国体など、世界や国内トップレベルの舞台で活躍し、県民に元気と誇りを与えている。

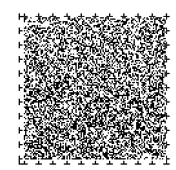
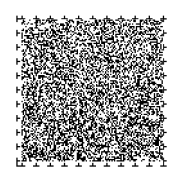
- 例えは
- ◇ 佐賀出身の金メダリストの祝勝パレードで通りが埋め尽くされた。
  - ◇ 他県の人から「佐賀はアスリートの宝庫だね」と言われるようになった。
  - ◇ 子どもたちは、小さいころからいろんなスポーツ種目を経験している。



佐賀県の豊かな自然、歴史、文化などの魅力が発信され、多くの人が国内外から観光やスポーツイベントやキャンプ・合宿で佐賀を訪れ、交流するなど、スポーツによって地域が賑わっている。

- 例えは
- ◇ 国内外からスポーツキャンプに訪れた選手たちと地域の人が交流している。
  - ◇ 大会をきっかけに佐賀県のファンになった人が今年も来てくれた。
  - ◇ 毎年大きなスポーツイベントが開催され、国内外から観客が集まっている。

※さがんレガシー  
「佐賀の」を意味する「さがん」と、「遺産」を意味する英語「legacy(レガシー)」を合わせた言葉で、両大会後に佐賀県に残したいもののこと。



# 国民体育大会・全国障害者スポーツ大会の概要

## 国民体育大会

昭和21(1946)年の第1回大会開催以来、毎年各都道府県持ち回り方式で、また、第3回大会からは都道府県対抗方式で、国民スポーツの普及、競技者・指導者の育成、スポーツ施設の整備、スポーツ組織の充実など、スポーツ振興体制の確立とスポーツ文化の形成に総合的に寄与する、国民の各層を対象とする体育・スポーツの祭典として開催されています。

昭和36(1961)年からは国のスポーツ振興法に、平成23(2011)年からはスポーツ基本法に定める行事の一つとして、(公財)日本体育協会・文部科学省・開催地都道府県の三者共催で行われています。

本県では、昭和51(1976)年に「さわやかに すこやかに おおらかに」のスローガンの下、スポーツの本質と本県の実情に即した質実国体を目指して、「若楠国体」をテーマとして開催し、天皇杯(男女総合優勝)も獲得しました。

## 全国障害者スポーツ大会

昭和40(1965)年から身体に障がいのある人々を対象に行われてきた「全国身体障害者スポーツ大会」と、平成4(1992)年から知的障がいのある人々を対象に行われてきた「全国知的障害者スポーツ大会」を統合した大会として、平成13(2001)年から国民体育大会終了後に、国民体育大会と同じ開催地で開催されています。

大会は、障がい者の社会参加の推進や、国民の障がいに対する理解を深めることを目的に開催されています。

平成23(2011)年からはスポーツ基本法に定める行事の一つとして、(公財)日本障がい者スポーツ協会・文部科学省・開催地都道府県等の共催で行われています。

本県では、昭和51(1976)年に「がんばって はげましあって わく希望」のスローガンの下、2日間の日程で「全国身体障害者スポーツ大会」を開催しました。

国民体育大会・全国障害者スポーツ大会の概要

# スポーツを取り巻く環境

昭和51(1976)年に佐賀県で開催した1巡目の国民体育大会・全国身体障害者スポーツ大会は、日本が高度経済成長を続ける中での開催であり、競技場や道路などの社会資本整備促進、県内地域住民の団結、住民スポーツの普及振興などで大きな意義を持つ大会でした。

しかしながら、2巡目の開催となる平成35(2023)年の国民体育大会・全国障害者スポーツ大会は、人口減少や人口構成の変化、ライフスタイルやスポーツの楽しみ方の変化・多様化が進む中での開催となります。



だからこそ、両大会の開催を通して、年齢、性別、障がいの有無に関係なく、誰もが、それぞれのスタイルでスポーツを楽しむことができる環境づくりに取り組むとともに、スポーツを通じた人や地域の交流を促進し、「スポーツによる地域の活性化」をより一層進展させたいと考えます。

## 国内の環境

### 1 人口の減少と少子高齢化の進行

我が国では、総人口の減少と少子高齢化が進むとともに、世帯人数の減少と高齢単身世帯、高齢夫婦世帯が急速に増加しています。

### 2 定期的な運動・スポーツ実施者の割合増加(特に高齢者)と、その男女差の縮小

近年、高齢者を中心に、定期的に運動やスポーツを行う人の割合は増加傾向にあり、その男女差は縮まっています。

### 3 障がい者スポーツの認知度アップと、競技性の高いスポーツの出現

英国で負傷兵のリハビリとして始まった障がい者スポーツが、スポーツとして楽しめるようになってきました。我が国においても長野パラリンピック冬季大会における日本選手の活躍により、広く国民が障がい者スポーツをスポーツとして認知するようになり、競技性の高いスポーツも数多く見られるようになってきています。近年、「障がい者スポーツ」を「パラスポーツ」と呼ぶ動きも始まっています。

### 4 オリンピック・パラリンピック東京大会をはじめ、スポーツの国際大会の国内での開催

平成32(2020)年オリンピック・パラリンピックの東京開催をはじめ、その前後には、ラグビーワールドカップ(2019年)やワールドマスターズゲームズ(2021年)など、国際レベルのスポーツイベントの国内開催が決定しています。

### 5 スポーツ庁の設置

平成27(2015)年10月1日、文部科学省の外局としてスポーツ行政を一元的に担うスポーツ庁が設置され、スポーツに関する施策を総合的かつきめ細やかに推進することが期待されています。



## 県内の環境

### 1 全国よりも早いペースでの人口減少

本県の人口は全国を上回るペースで減少しており、高齢化は全国より早く、少子化はやや緩やかに進行しています。また、近年は一貫して転出超過であり、15~24歳における転出超過が顕著になっています。今後も、全国平均に比べ緩やかではあるものの、人口の減少に加え、少子高齢化が進むと予測されています。

### 2 運動・スポーツ実践の二極化とスポーツの健康志向・個人志向

平成25(2013)年に県が実施した「県民のスポーツ意識に関する調査」(以後、「県民調査」という。)によると、運動やスポーツをする人・しない人の二極化が鮮明になっています。一方、運動やスポーツを行う理由も、「友人・仲間との交流」や「楽しみ・気晴らし」から、「健康・体力づくり」「美容や肥満解消」にシフトするなど、健康志向の一層の高まりと同時に、スポーツの個人志向が進行しています。

### 3 低い障がい者スポーツの実施率

「県民調査」によると、成人の週1日以上運動やスポーツの実施率は37.1%であるのに対し、平成25(2013)年の「佐賀県障害者スポーツ大会」参加団体への調査では20.4%と下回っていました。

### 4 県スポーツ行政の一元化

佐賀県は平成24(2012)年4月、これまで複数の部局に分かれていたスポーツに関する部署を、全国に先駆け、知事部局のスポーツ課に一元化して、スポーツ推進に取り組んでいます。

### 5 年齢、性別、障がいの有無等に関係なく楽しめるスポーツイベントの開催

平成25(2013)年から、これまで別々に開催されていた県民体育大会、佐賀県障害者スポーツ大会、さがねりんピックの開会式や一部競技を合同で開催しています。

### 6 スポーツツーリズムの推進

平成25(2013)年、佐賀県スポーツ課内にスポーツコミッション\*を設置し、平成26(2014)年度は、46チーム・延べ8,253人の国内外からのスポーツキャンプ・合宿を受け入れました。

#### ※スポーツコミッション

本県の情報発信、イメージアップおよび地域の活性化を図るため、スポーツキャンプ・スポーツ合宿やスポーツ大会・イベントの誘致を行う部署。

# エピローグ

## そして、ある家族の会話

平成35年「国民体育大会」「全国障害者スポーツ大会」の佐賀県開催から歳月を経て、佐賀県に住むある家族が、こんな会話をかわしていたら、両大会は本当の意味で、「めざした大会」を成功させたのだと、わたしたちは誇りに思います。

子 「お父さん、見て見て！ドリブルうまくなったやろ!？」

父 「おう、なった、なった。」

母 「最近、よう外で遊びよるねえ。」

父 「自然がいっぱいだし、子育てもしやすいし、そんな環境が気に入って、君の実家の佐賀に移ってきたけど、佐賀って職場でも、ご近所でも、ジョギングとか、スポーツとか何かやっている人が多いね。昔からこう？」

母 「ううん。今ほどじゃなかったんよ。私が高校生のとき、国体と障がい者スポーツの全国大会があっさ。私はスポーツは苦手やったけど、友達とゲームメーカーとして参加したと。佐賀県の選手がたくさん活躍して、結構、盛り上がったし楽しかったな。あれからかなあ、いやそのちょっと前からかな、私みたいに軽い運動始める人が増えたの。」

父 「ふーん。そういえば、よく大学部活の合宿や海外チームのキャンプもやって来るよね。」

子 「お父さん、今度、車椅子バスケの選手も来るとよ。ねえ、一緒に試合は見に行こ！」

父 「あれは、がばい見ごたえあるもんなあ。よし、行こう！」



## 平成35年国民体育大会・全国障害者スポーツ大会 佐賀県準備委員会

会長 山口祥義(佐賀県知事)

佐賀県市長会 (一財)佐賀県手をつなぐ育成会  
佐賀県町村会 佐賀県精神保険福祉連合会  
(公財)佐賀県体育協会 (一社)佐賀県身体障害者団体連合会  
(一社)佐賀県障がい者スポーツ協会 佐賀県商工会議所連合会  
(一社)佐賀県医師会 佐賀県商工会連合会  
(公社)佐賀県看護協会 (一社)佐賀県観光連盟  
(福)佐賀県社会福祉協議会 佐賀県教育委員会  
佐賀県

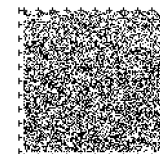
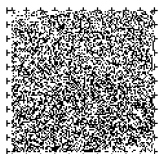
【基本構想策定時の県準備委員会構成団体(順不同)】

\*基本構想作成に当たっては、次の委員会において原案を作成いただきました。

## 平成35年国民体育大会・全国障害者スポーツ大会 基本構想作成委員会委員

	氏名	団体・所属 (50音順・敬称略)
委員長	坂元 康成	佐賀大学文化教育学部教授
副委員長	川島 宏一	筑波大学システム情報系教授
委員	愛野 時興	祐徳自動車(株)代表取締役 (公財)佐賀県体育協会副会長
	有森 裕子	(株)RIGHTS. 取締役 スペシャルオリンピックス日本理事長
	伊藤 数子	NPO法人STAND代表理事 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会顧問
	井上 英明	(株)パーク・コーポレーション代表取締役 (株)アスロニア取締役
	倉成 英俊	(株)電通総研 creative project director
	佐藤 和歌子	NPO法人森林をつくろう理事長
	副島 正純	(一社)ウィルチェアアスリートクラブ ソシオSOEJIMA 東京マラソン車いすレースディレクター
	為末 大	(一社)アスリートソサエティ代表理事
	牟田 雄一郎	DJ、MC、ナレーター(YUYA)
	森田 久代	佐賀県教育委員会委員
	山本 浩	法政大学スポーツ健康学部教授

YOU GO! I GO!  
HERE WE GO!!



お問合せ先

平成35年国民体育大会・全国障害者スポーツ大会  
佐賀県準備委員会(事務局) 佐賀県スポーツ課内

●住所/佐賀県佐賀市城内一丁目1番59号  
●TEL/0952-25-7322  
●FAX/0952-25-7375  
●E-mail/sports@pref.saga.lg.jp

(注)事務局は、基本構想策定時(平成27年10月15日)。